

# 108 学年度第一学期 ワンアジア財団国際講座

「人文通識：アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座(15)

題目：いま、なぜアジア共同体なのか

鄭俊坤

## 1. 問題提起

※近代国家の持つシステムや制度的壁を乗り越えるだけではなく、近代国民国家の形成過程で創られてきた人々の心の中にある内面的壁(内なる壁)から卒業する。

- ① 「国家」と「国民」の概念に縛られず、国民国家の「制度的壁」と「内なる壁」を超えて、新たな共同体の形成に向かう。
- ② アジア共同体に関する二つの視点でのアプローチ
  - A. 構造機能論的アプローチ(政治・経済・安全保障) → 国家
  - B. 社会・文化・教育視点でのアプローチ → 個人
- ③ Glocalization の視点 → Identity(中央アジア・インドネシア・日本・韓国)
- ④ 国境を越える二種類の人々の移動 → 今の生産形態に不可欠
  - A. 才能と富を持つ人々の移動(自選択的に越境)
  - B. 迫害や貧困から逃れる為に国境を越える人々
- ⑤ グローバル化する「経済システム」と、依然として国民国家を基盤とする「政治システム」→ 二重のシステム(摩擦と対立) → 20 世紀後半以後の世界の方向と現状(国益、主権国家の枠組みの中でのみ表現、正当化)
- ⑥ このような「変化」と「限界」についての対応がキーワード：資本主義・民主主義も→機能不全→従来の方法やシステムでは地球的諸般問題(格差・貧困・環境・エネルギー・食料・安全保障などの)について、答えを出す事が不可能
- ⑦ 一つの国で解決できることは限定される。

## 2. 「変化」や「限界」についての対応

- ① 変化を拒んで過去の古き良き時代の価値と伝統に帰しようとする。
- ② 既存の限界や危機から卒業し、変化を追求して新しいものを創り上げる。
- ③ 変化における「方向」模索 → 「原点」に戻る→問題の根本・本質について着目  
⇒原点での発想⇒正確な処方を行うためには、現状の把握、本来の状態や目的を理解(存在理由)→例えば、「自己とは」「人間とは」「国民とは」「国家とは」

3. T. ホブズ(Thomas Hobbes) の国家理解 → 「人間理解」から → 自分の生命は自分で守るしかない「自然状態」における人間は、完全に自由である。その自然状態を維持しながら、生命の危険を招く危険状況から個人を守るために、社会契約による近代国

家が登場(『リヴァイアサン』(1651年))

⇒すなわち、人間の自然状態(殺しあいの状態が出現可能:万人の万人に対する闘争状態)  
→生命の危険を回避するために→自然権を捨て→契約(社会契約)→共通の権力  
(Common Power):最強・最高の権力=主権→(法の支配)⇒人間を社会(国家)状態へ

⇒①社会の起源、②社会が維持される為の最低必要なルール⇒人が人と約束⇒人々の共有  
の土台が作られる⇒国家は人為的産物

#### 4.国家・個人(国民)について、本質的な問題提起(事例を紹介)

<東日本大震災>(2011年) ⇒原子力発電所事故

- ① 主権国家の限界
- ② 国家と個人の関係、情報公開・知る権利
- ③ 安全保障(伝統的な安全保障→非伝統的な安全保障:人間の安全保障)
- ④ 市場経済中心の限界、産業技術と命の問題
- ⑤ 効率性・合理性の問題/ 経済性・安全性の問題

A.地理的・空間的視点での問題提起(国境の越えた視点、地域統合の必要性)

B.時間的・歴史的視点での問題提起(時代を越えた視点、全人類的視点)

⇒ここにアジア共同体についてのヒント⇒国家を越えた視点・発想→近代国民国家を形成・維持してきた既存のシステムや価値体系をもって、今日の諸問題を克服・解決することは困難→今まで機能してきた既存の考え方や制度・体制から卒業して、新しいシステム・価値体系・哲学的発想が必要

#### 5.近代国民国家のもう一つ壁:「内なる壁」

- ① ウェストファリア条約(1648年)以後の国際社会は、国民、領土、主権(統治権)が中心となり  
→国境・国民・国家が強調
- ② ナショナリズム →国民化 →アイデンティティ
- ③ 国民国家は「一つの共同体に一つの文化があり、一つのアイデンティティが形成される。」  
という想定→その為に「国民化」
- ④ 「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体」(ベネディクト・アンダーソン)
- ⑤ 文化→「人間の行動を制御する装置」(C.Geertz)→人間は自分の文化の中で行動し判断  
→文化やアイデンティティから自由→他者との共存
- ⑥ アイデンティティの流動化 →文化・アイデンティティから自由 →他者とのコミュニケーションを可能にする重要な条件

## 6.個人・国家・国民の関係(内面的側面)

- ①人間に対する根源的な理解・認識（人間理解）→共同体のあり方や方向性
- ②人は最初から国家についての特別な意識も持っているのではない→しかし国民化された身体が、祖国のために死ぬことを望み、国民化された身体が他の国民を殺すことを名誉と感じる段階へと変わっていく歴史的経験⇒何がそうさせたのか。
- ③民族と国家、そしてナショナリズムが結びつき、近現代の国民国家において人類は多くの悲惨な暴力と混乱を経験→人間の心の中に抱いてしまった「国境」という「コダワリ」を捨てなければ紛争解決にはならない。見ていないものを否定し、自らのアイデンティティを強化するために意図的に「ウチ」と「ソト」とを明確に規定
- ④基本的人権というものは普遍的な概念であり国境とは無関係のはずだが →実際は国境の内側の特定の人間に適用、国境の外側の人間、外国籍の国内居住者や無国籍者には通常基本的人権の保障は及ばない。
- ⑤共同体の共通の絆は個人の持つ多様性の尊重を通じて、築き上げて行く
- ⑥国家が「至高の存在」なのか、「必要悪」なのか→国家は永久に確定している構造や体制ではなく、常に新しい変容を続けなければならない。
- ⑦「国家」や「国民」意識は近代国民国家の形成過程の人為的な産物

⇒アジア共同体を構築することは、地理的、空間的に国境を超える連帯の意味だけでなく、近代国民国家の形成過程で生み出された他民族・異文化に対する「内なる壁」（偏見・先入観）から卒業（それは他者に対する理解・配慮・違いに対する包容力）

### 結び—国民国家を超えて

⇒アジア共同体は、制限的な共同体ではなく開かれた共同体⇒「地域的な概念に拘束されず、人間の持つ可能性を広げると同時に、豊かで多様な個性、伝統や文化が尊重されるための共同体であるべき」 ⇒それは人類自らが作り上げてきた古い「壁」を一つずつ越えていく過程としてのアジア共同体でもある⇒最終的には世界が一つになる。

- ②21世紀は、「国家」や「国民」という概念に縛られることなく、多民族・多文化で構成される市民社会の中で生きる選択肢しかない。
- ③「人間は互いに似通った人々同士でグループを形成するのではなく、グループ形成してから似ていると判断する」→民族という名の「想像の共同体」※Benedict Anderson
- ④政治共同体の構成員のアイデンティティのコードを「民族」から「市民」へ転換
- ⑤自由と平等、そして快適で安全な環境と幸福を追求→国家と言う共同体の究極の目的
- ⑥「競争のパラダイム」から「共存のパラダイム」に転換
- ⑦「我々は国と国ではなく人と人とを結び付けようとしている」（1952、ジャン・モネ）

※アジア共同体を形成することは、単なる国家間の制度的統合を意味するものではなく、  
今までの制度や価値観を超えて（卒業）、これからの時代に必要な新しいパラダイムの変  
換を意味する概念である。